

2. 甲状腺の Hyperfunctioning Nodule の Scintigram

稻田満夫 風間善雄 高山英世
(天理よろづ相談所病院 内分泌内科)

甲状腺の Hyperfunctioning Nodule の診断に甲状腺 Scintigram が重要であることはよく知られている。

われわれは最近4例のそれと思われる症例を経験したので報告する。

第1例は45才男子でるいそうを主訴として入院した。右側に軽度の甲状腺腫をみとめ弾性硬であった。その甲状腺機能検査は明らかに甲状腺機能亢進を示した。甲状腺 Scintigram は右側甲状腺腫に一致して ^{131}I 摂取は著明であり、左側甲状腺のそれは不良であった。Triiodothyronine 投与により右側甲状腺の ^{131}I 摂取は抑制されずまた TSH 筋注により左側甲状腺も描出された。

本症例は約2ヶ月後甲状腺機能亢進症状の増強と共に左側甲状腺も右側のそれと同じく ^{131}I 摂取が著明となつた。本症例においては甲状腺 Scintigram に推移について現在長期観察中である。

第2例は27才女子でるいそうを主訴として入院した。右甲状腺に一致して弾性硬の甲状腺腫をみとめ甲状腺は触知しない。甲状腺機能検査は明らかに機能亢進を示した。甲状腺シンチグラムは右甲状腺に一致して ^{131}I 摂取が著明で左甲状腺のそれは不良、また右甲状腺の ^{131}I 摂取は Triiodothyronine の投与で抑制されずまた TSH 筋注により左甲状腺も描出された。以上2例はPlummers disease と考えられその甲状腺 Scintigram の特殊性につき報告した。つぎに甲状腺機能検査成績は正常で hyperfunctioning nodule を示す2症例を経験したが、この様な hyperfunctioning nodule は Scintillation camera による Scintiphoto で視覚的に簡単に発見できることを認めた。

*

3. 肝転移を伴った副腎癌の1例 —肝シンチグラムを中心として—

日下部恒輔 永山洋一 山田 秩
遠藤治郎 井村裕夫 深瀬政市<第2内科>
鳥塚莞爾 藤井正博<中央放射線部>
(京都大学)

副腎癌にて術後内分泌学的検査の成績から再発が疑わ

れたさい、Scintiphoto 等によって肝における転移巣が確認された症例を報告する。

37才女子、高血圧、男性化傾向等副腎皮質機能亢進症状を呈し、尿中 17OHCS とくに THS, 17 KGS とくに Pregnandiol が高く、副腎癌と診断剔出術を施行す。手術時肝に異常を認めず、後術症状および尿中 Steroid 所見の著明な改善を見たが、一年後再び高血圧および腹部膨満感を来し再入院。肝右乳線上 2 横指、尿中 17OHCS 再びやや増加の兆あるを認む。

^{198}Au 100 μCi を静注して作製せる Scintiphoto において肝中央部に明らかな欠損部を認めた。つぎにこの Scintiphoto 作製時に Scintillation Camera に連絡された 1600 Channel の Memory 装置を用い、Scintiphoto の画面を 40×40 の Matrix に区分して各 Matrix の RI 量をそれぞれ memory させ、臓器内の RI 分布を観察すること、本症例では右葉部に高い RI 活性がみられ、かつ左上部に高い RI 活性を有する脾臓の出現を認めた。つぎに ^{131}I -Rosebengal 100 μCi を静注後 3 分ごとに連続撮影して Rosebengal の臓器内分布の経時的変動を追跡するに、その肝内分布が不均一でとくに肝中央部の欠損がみられた。1600 Channel の Memory 装置を用いた時の RI の Map 像では Threshold を上げることにより肝中央部の欠損が非常に判然と認められた。選択的血管造影では左肝動脈が断続しており、その領域すなわち肝中央部で Scintiphoto における欠損部に一致して Tumor stain がみられた。なお、肝動脈と肝静脈との間に Shunt があり、肝硬変を疑わしめる所見であった。

*

4. 骨髄スキャニング——2.3 の経験

藤森克彦 佐藤道明 刈米重夫
脇坂行一 (京都大学 第1内科)

血液疾患の診断においては、骨髄の検索は重要な意義をもつてゐる。われわれは骨髄細網細胞のコロイド摂取能を用い、 ^{99m}Tc 硫黄コロイドを作製して静注し、シンチレーションカメラにより骨髄スキャニングを行なつた。 ^{99m}Tc は ^{99}Mo - ^{99m}Tc Generator に生理的食塩水を滴下して $^{99m}\text{TcO}_4^-$ の形で溶出し、溶出曲線を描いて、放射活性の高い部分を集め、コロイド作製に使用したコロイドの製法は、Nelp 等の方法に準じて行なつた。ペーパークロマトグラム法によりコロイドを分離定量すると産生率は約 90% であった。コロイドの投与量は 5 mCi